

選 抜 の 諸 方 式

言うまでもないが『選抜の諸方式』という入学者選抜に関する研究テーマがカバーする問題は非常に多岐にわたる。その中で、面接試験、小論文及び実技試験に関係する研究の動向と、受験機会の複数化に直接関係する研究の動向は、それぞれ独立の項目として論じられるので、ここではそれ以外の選抜の諸方式の研究動向を概観する。

とはいえ、昭和62年度からスタートした受験機会の複数化という大きな制度の変更は、各大学の入試研究全般に大きな影響を与えている。それは、各大学が62年度の選抜の諸方式に関連して選択した入試研究のキーワードが、上記二つの独立した項目を除けば、「2段階選抜(いわゆる足切り)」、「推薦入学」、「追加合格」及び「第2次募集(定員留保、欠員補充を含む)」だけに集中していることからもうかがわれる。「推薦入学」が受験機会複数化と無関係ではないにしてもちょっとニュアンスが違うのでこれを除けば、あとのキーワードは受験機会の複数化によって質的な影響を受ける研究テーマであることは言うまでもない。

さて、受験機会の複数化が各大学に共通もたらした『新しい現象』を簡条書的に書くと、次のようになるであろう。

- ・志願者数が激増した(数倍になった大学も少なくない)
- ・共通1次試験成績による2段階選抜(いわゆる足切り)を実施する大学が激増した

- ・2次試験の欠席者の割合が増加した
- ・複数大学合格(私大を含む)によって相当数の辞退者が予想されるため、定員をかなり上回る合格者を発表した
- ・辞退者が予想を上回った大学が少なかった
- ・2次募集(定員留保、欠員補充を含む)、追加合格などを含め、定員確保のために特別な努力を払った大学が多かった

これらの全く『新しい現象』に、各大学が場当たり的に対応したのでは決してないことをまず強調しておきたい。それどころか、各大学は、複数化のメリットを生かし、デメリットを極力抑えるため最大限の努力を払ったのである。そしてその努力は、各大学が長年にわたって蓄積してきた入試研究の成果があったからこそ可能であったことも強調しておきたい。以下に、主として2段階選抜、推薦入学、第2次募集などに関連して行われた各大学の入試研究動向を概観する。

1 2段階選抜

2段階選抜方式を採用することにより、入試の一発勝負的性格をやわらげ、よりキメの細かい選抜が可能であるなどの理由から2段階選抜を積極的に評価している大学もあるにはあるが、圧倒的多数の大学は、試験場確保、採点能力、入試事務遂行能力などの理由から、いわば必要

悪的に2段階選抜方式を採用している。その際、最終的な合否判定で、2段階選抜にもれた受験者が合格するようなことが無いようにという意味での適正倍率あるいは安全倍率を理論的に推定する研究が行われ、その成果を実際の2段階選抜で活用した大学が多い。

2 推薦入学

選抜方式として推薦入学制度を採用する大学は着実に増えており、また近い将来これを導入する前提で推薦入学制度を調査・研究している大学も増えている。推薦入学制度を採用している大学のほとんどが、一般入試で入学した学生との比較の追跡調査を、推薦入学制度導入以来継続的に行いデータを蓄積している。これらの調査結果は概ね推薦入学者は一般入学生と同程度、あるいはむしろ良好な成績を上げているなど、推薦入学制度の積極的側面を示すものが多い。ところがある大学では、推薦入学者が大学院に進学する割合が一般入学者に比べると極端に低いという事実を指摘した上で、その大学で採用している推薦入学制度、あるいはその大学の推薦入学者の意欲などに関して疑問を投げかけている。また、推薦選抜で面接と小論文を課し、2次試験で小論文を課しているある大学で、推薦選抜で不合格になり2次試験を受験し小論文を2回書いた学生について、二つの小論文試験評価の間の相関調査を行った。その結果数学と外国語試験成績に比べると相関が極端に低いことを報告し、小論文試験で測定できる能力は何か？という問題提起を行っている。

推薦入学者に対する追跡調査を、推薦で入学

し卒業した人にまで広げて行っている大学も数大学ある。このような卒業生は、一般に推薦入学制度を積極的に評価し、また推薦入学の枠を一層広げて欲しいと希望していると報告している。

しばしば指摘されていることであるが、推薦入学制度成功の重要な鍵として、大学と高等学校の間の信頼関係の確保という問題がある。大学の側には正直なところ、高等学校が推薦制度を受験方略的に受け取りすぎているのではないかという印象がある。この信頼関係の確保に関して、高等学校側と積極的に交流して推薦制度を十分に理解してもらうための努力を傾けた大学が多かった。推薦合格者には入学辞退者がほとんどいないと報告している大学が多いという事実に鑑み、このような努力は今後も一層推進すべきであろう。

3 第2次募集

受験機会複数化の影響と思われるが、定員留保や欠員補充の第2次募集を行った大学は昨年度より増加した。第2次募集による合格者の入試成績は第1次募集合格者に比べて優れているというのが昨年度までの一般的傾向であったが、今年度は必ずしもそうではない事例が目立った。すなわち第2次募集の上位合格者の中に入学辞退者が多く、その結果入学者についてみると第1次募集の入学者に比べてむしろ入試成績が悪いという大学が少なくなかった。つまり、いままで優秀な学生を選抜できるという第2次募集のメリットが、受験機会の複数化によって大きな変貌を強いられていると考えることができよう。